

オンライン導入が当たり前になつて久しい。周囲でも大学の授業や研究会など、オンラインでのやり取りは日常になりつつある。先般、「オンラインにおける寺院活動」と題したシンポジウムをコーディネートした際に、個人的に興味をもつていたのが「はたしてオンラインのつながりだけで信頼関係を築くことはできるのか?」という問いである。

きっかけは霊長類研究の第一人者・山極壽一氏への某インタビュー記事で、人はインターネットやスマートフォンなど、身体が離れたまま脳でつながる装置によって安易に「つながった」と錯覚してしまうが、実際には信頼関係が担保できているわけではない。実はゴリラなどの動物もそうだが、五感のうちの触覚、味覚、嗅覚という「共有できないはずの感覚」こそが信頼関係やチームワークをつくる上で大事なものである、といった主張を目についたことである。確かにオンラインは視覚と聴覚という共有しやすい感覚器官に依存する部分が圧倒的に大きい。情報伝達という面での不足はないけれど、ゼロからイチを創出するような新しい関係性作りには向かないのが実情だ。

『手の倫理』の著者である伊藤亜紗氏によれば、西洋哲学における感覚のヒエラルキーは視覚と聴覚が基本的に上位で、それ以外は下位に振り分けられてきたという。たとえば認知対象が刃物や毒であつたりする場合、比較的安全な距離感にある視覚・聴覚に比べて、触覚・味覚・嗅覚というのはどうしても危険

工藤量導

やわらかくて
きもちいい風
わたしの頬をなでた
だいじょうぶだよって
言われたような気がして
大きく
息をすいこんだ

(原田郁子「やわらかくて きもちいい風」より)

OP-1
心か
風

微

風

吹

動

くどう りょうどう 1980年青森県今別町生まれ。青森教区本覚寺副住職。博士（仏教学）。浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師、淑徳大学兼任講師。専門は中国浄土教、著書に『迦才「浄土論」と中国浄土教一凡夫化土往生説の思想形成』（法藏館、2013年）など。

を伴う、頼りにしづらい感覚器官と見なされてきたことも一因のようだ。

ただし、触覚の「弱さ」は同時に信頼を築く「強み」にもなりえる。社会的不確実性、つまり何がしかのリスクがある場合でも、他者に心を許して身をあずける覚悟をもつて、ゼロどころかマイナスの距離感のなかで相手の懐に飛び込むことが、触覚を通じたコミュニケーションの魅力でもあるのだ。不確実である「にもかかわらず」信じる、この逆説を埋めるのが「信頼」なのだという。

もう一つユニークな指摘が、触覚には伝達モード（さわる）と生成モード（ふれる）があるというもので、前者は一方向的な作用のこと、後者は「ふれあい」という言葉に象徴されるように、双方向的な触感を通じてその場で生み出された要素を共感的・情緒的に取り込むライブ感あふれる交わりのことである。

ところで、会議や催しごとの冒頭に、十回の念佛を声に出して一緒にとなえる「同唱十念」の作法は、浄土宗では定番の「さあ、これから始めるぞ」というシグナルである。ところが、これがオンラインになつた途端にどうも具合がよくない。多人数で同時に使うとどうしてもタイムラグが生じてしまい、不思議ないら立ちを醸し出すのである。もちろん楽観的に考えれば、これもいざれはデジタル技術の進展によつて解決される問題かもしれない。

一方で脳裏をかすめたのはもう少し根本的な問題だ。共に声を合わせる十念という行為は単なる聴覚（音声）の共有に限定されるものなのだろうか。

あらためて考えてみれば、十声を一緒にとなえているのはほんの短い間だけれど、その刹那刹那のなかで、共に喉を振わせ、共に身を振わせ、共に心を振わせて、受け手である仏に最高の和合声を届けるべく、最適解を求めて不斷のコミュニケーションが繰り広げられている。か弱き凡夫たちが互いの呼吸を拾い合つて信頼を築きゆくながで共作した、まさにそよ風が頬をなでるようなやさしいハーモニーなのだ。

そう思えば、同唱十念は決して伝達モードではなく、生成モードとしてその場で生み出されてゆく即興性こそが命なのであって、どこか共時性や相互性に欠けるオンラインではしつくりこないのも当然だろう。十念は誰かの声に寄りかかって、他者のリズムに半分乗りながら、「だいじょうぶだよ」と伝え合つて併走してゆく全身体的なコミュニケーションの塊なのだから、どうしても互いの身口意に触れ合うような確かな手ぎわが必要となるのだ。

そうして生まれた呼吸と声息の共同作品は、やわらかくて、きもちよくそよぐ風のように私たちの間を潜り抜けて、停滞した気分を仕切り直して誰かと共に前に進もうという凜とした決意をそつと促してくれる。

さあ、「にもかかわらず」をグッと飲み込んで、大きく息を吸い込もう。だいじょうぶ。心を開きゆだねて、何かを始めてみよう！